

II A - 1 てんかん児の認知機能

富山医科薬科大学神経科精神科、同小児科

○野田真紀子、清水昭規、倉知正佳、
村上美也子、山谷美和、小西 徹

【目的】今回我々は、てんかん児における知能および記憶力などの認知機能について、それらが①脳波所見(発作焦点、二次性全般化の有無、発作波の出現頻度、基礎波の徐波化の程度)、②臨床発作型、③罹病期間、治療薬剤などの臨床所見とどのように関連しているか検討したので報告する。

【対象と方法】対象は、当科で治療中のてんかん児のうち、暦年齢が10歳から12歳(平均11歳6ヵ月)の19例(男子9例、女子10例)で、原発性全般てんかん6例、BECCT 5例、BEOP 1例、その他の部分てんかん7例である。19例全例に、WICS-R知能検査、ベントン視覚記憶検査、ウェクスラー記憶力検査を施行した。

【結果】19例全例における検討では、WICS-RによるIQの平均は 82.7 ± 4.9 で、境界から平均の下であったが、動作性IQと言語性IQの間に差は見られなかった。ベントン視覚記憶検査の正確数は 5.4 ± 0.5 、誤謬数は 7.6 ± 1.3 で、右側の誤謬数の方が、左側よりも多くみられた。ウェクスラー記憶力検査の平均は 51.3 ± 3.3 、注意力の指標とされている数唱の平均は 9.7 ± 0.5 で、いずれも低下していた。

前述した①～③の各項目別の検討では、脳波上、二次性全般化のみられる群は、みられない群に比して、ウェクスラー記憶力、特に論理的記憶の成績が悪く($P < 0.01$)、全般性発作波もしくは左側焦点を有する群は、右側焦点を有する群に比して、数唱の成績は不良であった。 $(P < 0.05)$ 。また、徐波化の程度が重度である群は、軽度である群に比して、IQに及ぼす影響は大きく($P < 0.05$)、罹病期間が短い群は長い群に比し、数唱の成績は不良であった。 $(P < 0.05)$ 。

【結語】てんかん児の少なくとも一群には、認知機能の低下がみられ、上記の脳波所見等と密接に関連していることが示唆された。

II A - 2 擬似発作の検討
—精神医学的アプローチ—

関西医科大学・精神神経科

○磯谷俊明 加護野洋二 岡島詳泰 山柘茂樹
大矢大 木下利彦 柳生隆視 斎藤朱実
永田昌弘 山本幸良 延原健二 斎藤正己

ヒステリーのけいれん発作が、てんかんのそれとの鑑別において多くの困難を生じる事は、従来より指摘されている。しかし、ビデオ・脳波同時記録により、臨床上診断困難であった擬似発作が、本来のてんかんと明確に区別出来るようになってきた。しかしながら擬似発作の精神医学的位置づけはヒステリー概念に包括されるのみで、診断学的にも、治療学的にもいまだ多くの検討課題を残している。

今回われわれは、13才から52才の6例の女性患者に擬似発作を認めたのでこれを報告し、ヒステリーとの関連、てんかんと類似性等につき検討し、治療困難例にいたる経過についても言及する予定である。

われわれはビデオ・脳波同時記録装置をもたないので、診断は主に発作間欠期脳波所見と入院時の発作所見から行った。まず、明らかに精神運動発作がありこれにヒステリーの合併した群では、擬似発作の確認が困難であり、今回の検討から除外した。残った6症例につきretrospective に検討したところ3例ではてんかんが否定でき、ヒステリー群と考えた。他の3例ではてんかんを完全に否定できなかったが、擬似発作が中心であり、治療困難群と考えられた。発症の誘因となった心理的背景に関しては精神病理学的検討も必要と考えた。